

大陸(中支)

我が青春

兵庫県 大久保 邦 雄

僕は、兵庫県の三大河川の一つ、千種川の源流で、昔から刀剣や甲冑に使用した千種鉄の産地であった宍粟郡千種町に、両親と五人兄弟の次男として大正十年六月二十八日に生まれました。山紫水明で人情味豊かな町で育ちました。何分耕地の少ない山里ですから、十三歳にして故郷を後にして、大阪の家具製造所にて見習従弟として働きました。十八歳まで満五年間一生懸命に働いて、一人前の家具職人になりました。その時代は、国民精神総動員運動が活発になり、ま

た中国大陸においては、戦線がますます拡大してました。これからは平和産業では駄目だと思い、軍需産業でないと生活が苦しくなると感じまして、たまたま知人が川西航空機鳴尾本社にいましたので、受験して採用され入社しました。仲良し三人組で共同下宿していました。家具職の技術を生かして、航空機(九七式海軍飛行艇)の組立て内装が専門でした。本機は世界に冠たる性能で航続力は世界一だと申していました。自分も一生懸命働きました。工長や班長にもかわいがられました。

昭和十六年七月に、徴兵検査があって、故郷の千種へ帰って受検し、第一乙種合格と判定を下されました。当時第一乙種合格は、甲種合格と同一に取り扱われました。入営までの間、川西航空で働いていました。

昭和十七年四月中旬、空襲警報が発令されてびっくりしました。後日、判明したが神戸に米軍のB25が来襲したとか、日本本土初空襲とのことでした。翌十七年七月十六日に、西部一〇一部隊入隊命令がきました。

兵科が飛行場関係で少し遅かったと思います。役場の兵事係吏員に伴われて入隊しました。同期の中には、病気のために「即日帰郷せよ」と言われて帰った者もいました。故郷で親戚や友人知人に盛大な出征祝で歓送された若者が不合格で即日帰郷という、非情な状態は今思ってもゾッとします。

宮崎県、高鍋陸軍飛行場大隊、西部第一〇一部隊で初年兵教育が行われました。自分は軍隊のことは何一つ知りませんから、一から十まですべて勉強でした。まず、一番に大きな声を出すことでした。これは人一倍大声でしたから完了で、二番目に行動の迅速が要求されました。そして軍人勅諭の暗記暗唱・次に戦陣訓・典範令・操典等々の記憶の外に、日常勤務の規則、喇叭号音にいたるまで、朝の起床から夜の消灯喇叭まで、初年兵はちよっとの休みもなく、頭と体を酷使して、

はじめて一人前の兵隊になるのだと実感しました。昔々、村の古老が兵隊に行つて来たら「一人前だ」と言われたが事実でした。

一期の検閲も無事終了して、一選抜にて進級しました。それからは日常訓練・演習の外に将校・下士官・大隊・中隊などの当番勤務、衛兵や不寝番勤務等々と初年兵の忙しさは話になりません。その年の瀬も押し迫った、ある夜、非常呼集の喇叭が鳴り響いてびっくりしました。出動命令です。

中支湖北省の漢口に出動でした。門司にて乗船し釜山へ渡りました。厳寒の朝鮮海峡は荒波で船は上下左右に揉まれ全員船酔いに苦しみました。有蓋貨車に詰め込まれて、京城・鮮満国境の鴨緑江・満支国境の山海関を通過して広漠たる中国大陸を何日かかったか不明だが、ようやく目的地漢口に到着しました。人事係曹長から「本部の事務職を手伝え」といわれました。自分は「事務系統は不適當です、職人ですから他の業務にしてください」と申し出ました。

「食堂勤務を命ず」といわれ、上級将校当番のよう

な業務に就きました。特に食事についての責任者となり、朝・昼・夕食、時によっては小夜食にいたるまで、栄養面と伝染病予防を厳重点検しました。勿論調理係は別にいました。体の楽な任務ですが、中国人の業者に目を光らせることが、最重要任務でした。演習訓練・衛兵分哨・不寝番等々の勤務は一切除外でした。約半年間この勤務を行い一般業務に戻りました。

武漢三鎮といって中でも漢口は重要な地点です。昭和十三年よりの占領下であるために、治安は良く行き届いていましたが、重要拠点故に、総べて部隊の移動などは夜陰に紛れて行われました。そのため、昨夕までいた部隊の兵営が翌朝には藻抜けの殻になっていたり、かと思えば、無人の兵営に翌朝は満員の部隊であったり、自分たち兵隊には不思議な事がたくさんありました。

我が隊、隼飛行第二五戦隊は秘密部隊で、軍隊内部においても極秘でした。自分の主任務は戦闘機の内装整備でした。川西航空機当時の技術がそのまま生かされて、十分に任務を全うしました。

支障なく勤務していましたところ、下痢と発熱が、二・三日続き、軍医が「A型バラチフスだ」といって、「即入院だ」と命ぜられました。当時チフスが流行していました。自分の外にも入院した者が沢山いました。完全治癒まで四カ月の間、病院のベッドの中で生活しました。

三週間ほどしたとき、「もう大丈夫だ」と思いました。退院後分かったことですが、自分が一選抜の上等兵になっていたことです。人事係曹長が自分の日常勤務を評価して推薦してくれたとのこと。それにつけても、日本を遠く離れた異国の地にて病気で逝去（戦病死）された人の心を思うとき、筆舌に尽くしがたい思いがありました。四カ月間の療養生活を送った自分には十分わかりました。

また、衛生兵は勿論、白衣の野戦病院看護婦さんの献身的看護には、ただただ頭が下がりました。二十歳の若い女性が一心に傷病軍人の世話をしている姿は、現在思い出しても頭の下がる、尊く美しいものでした。ナイチンゲール精神とは、あのような姿で行動される

ことでしょうか。

自分も完全治癒して四カ月ぶりに原隊復帰を命ぜられました。衡陽作戦の真っ最中でした。全軍出動で天手古舞だ。各部隊は警備要員を残して、大部隊が第一線へ出動していました。自分の大隊はご存知、飛行場大隊ですから、第一線への出動はありませんが、敵機の襲撃に備えて、戦闘機の緊急迎撃出動に万全を期し、戦闘機は勿論、滑走路の完全保管と十分なる戦闘隊形を常時整えていました。それでも不意をつかれて敵機の急襲や急降下爆撃、そして中には超低空飛行で機関砲や機銃の乱射を受けたこともありました。

自分が着任当時は、隼戦闘機もたくさんありました。蒋介石の本拠地の重慶爆撃や仏印の援蒋ルート爆撃の時は、我が部隊からも護衛用戦闘機が飛び立って行きました。見送る自分たちも、全機の無事帰還を祈って、雲の彼方に機影の見えなくなるまで見送り祈っていました。

任務終了帰還の電信が入ると、滑走路の脇に出て、おめでとう、御苦労様と搭乗戦士と機体とに呼び掛け

たものでした。が、未帰還機が一機でもあると皆の声は沈み、いい知れぬ寂しい時が一瞬過ぎて行きました。

“散る桜、残る桜も散る桜……”

半年・一年と時が過ぎ行くにつれ、機影が減少しました。蒋介石直轄の正規軍や便衣隊が攻撃して来るので、広い飛行場の警備は大変苦勞しました。特に夜間攻撃には閉口しました。彼らは地形を熟知しているから、真っ暗な闇夜でも、走り回って攻撃してきました。広い飛行場の東西南北と防戦一方の自分たちを嘲笑うかのごとき攻撃でした。敵を誉めるのもおかしいが、もし攻守立場が逆であれば当然だと自分は思いました。

自分が現地着任以来、約二年の間に何度か補充要員が来ました。昭和十九年末から二十年初頭に来た初年兵補充兵は、銃も帯剣もなしで、竹製の水筒を腰に一本ぶらさげて来ました。この姿を見た時点で「日本敗れたり」とわれ感ずでした。勿論、年齢も老兵で妻子のいる三十歳代半ばくらいの人が多く、顔を見るだけでも気の毒でかわいそうでした。昭和二十年になってからは飛行機も数少なくなつて、わずか数機が軍の連

絡用か軍上層部の緊急用に駐機しているだけでした。それでも広い滑走路と機体整備（退避遮蔽）を行っていました。

昭和二十年春、北京へ転進命令がきました。約二年間駐留した漢口、隼飛行第二五戦隊基地を後にしました。北京に到着して旬日を得ず、再度転進命令発令で、南朝鮮の水原オプギンに移動でした。元氣者の自分もこの時に（心臓病）倒れました。即、京城の陸軍病院に入院させられました。二カ月静養して、原隊復帰しました。

退院後は病院下番といって、さして任務もなく、毎日ブラブラとしてました。時、八月十五日昼前に全員整列の号令で、各隊肅然としていました。なんだかいつもと違う雰囲気でした。大隊副官が当番兵を指揮してラジオを持ち出してこられた。「気を付け」と大隊長の号令で全員襟を正していました。玉音放送だ。その後で教わるのですが、その時は聞き取ることのできる雑音でした。言い知れぬ一種異様な雰囲気か漂ってました。

ああ自分の三年余りの青春を軍隊という名の元に縛

られていたのだ。必勝を信じていた。これで本当にお国のためになったのだろうか。このときは馬鹿くさいような訳の分からぬ心情でした。この時に、ソ連が参戦し、一方的に不可侵条約を破棄し、満州から北鮮まで攻撃してきました。わが部隊は「濟州島に集結せよ」と命ぜられました。水原出発時に国防婦人会の襷を掛けた朝鮮の人が「御苦労さんでした」と言って、リンゴや種々の食物を持って見送ってくれました。

濟州島では、食糧の補給が無いから自給自足せよと命ぜられ、農耕に従事して畑作りに取り掛かる者、一番手っ取り早いといって船を漕ぎだして魚釣りに行く者と、手分けして全員一丸で働きました。魚が面白いほど捕れて、中でも「鱈」が大漁でした。全員喜んで食ったところが、腹をこわして、吐くやら下痢するやらの大騒ぎ（食中毒）、部隊の半数以上が倒れました。そうこうしていた時に復員の命令が出ました。昭和二十年十月五日でした。部隊温存物資開放といって倉庫を開いて各人で食糧・衣服自由に持ち出してよしてました。手作りのリュックサックを満杯にして背負い、

釜山へと行進しました。釜山の港は大陸からの引揚げ邦人や部隊でいっぱいでした。自分たちの部隊は米軍によって武装解除を受けました。各人の私物から時計や万年筆、中には財布まで取り上げられた者もいました。

乗船出航し、山口県の仙崎港に投錨しました。二日間船内待機して上陸手続を待ち、復員業務完了。上陸後は下関まで徒歩行進下関にて列車に乗りましたが、ちょうど台風の影響とかで、広島県福山にて列車は立ち往生しました。駅員の説明では「線路遮断で不通」。致し方なく、近辺を探すが泊めてくれる所なく、地藏堂を見付けて、戦友五名で一夜の宿としました。近隣の人が「兵隊さん御苦労さん」と見舞いに来てくれたので、手持ちの缶詰やたばこを少しあげたら大変喜んで、お粥を作って持って来てくれました。「人情いまだ地に落ちず」と戦友と語り、有り難くお粥をすすりました。

四日目に列車が開通しました。列車の窓から見えるものは、みな懐かしく、ただ市街地はいずれも殺風景

な焼け跡でした。その翌日一面焼け野原で瓦礫が山積みし、白鷺城がただ一つだけ聳え立つ姫路まで帰りました。

故郷へ帰る交通は遮断しているので、叔父の所を思い出して、訪ねて行くと焼け跡のバラック建てにいました。無事な自分の顔を見てびっくりして「生きていたのか」という始末でした。自分が漢口で入院しA型パラチフスで危篤状態の時に、陸軍の第一報として電報が役場に打ってあったために、皆は戦病死したと思っただけ。早速電話局から田舎の役場に電話して、我が家へ知らせてくれと頼み、叔父の所で休みました。翌日の夜遅く兄が迎えに来てくれましたが、乗り物は何もなく、自分の足を頼りにするより方法がなく、翌日兄と二人で三日ほどかかって故郷へ帰りました。

懐かしの我が家、そして山も川も「国破れて、山河あり」、当分静養してから働けと、皆に慰め励まされました。自分は「一度は死んだ身だ」と元氣を出して、腕に覚えの家具職を一生懸命やった甲斐あって現在の会社が出来ました。思えば軍歴三年四カ月、戦中戦後

といろんな苦勞や悲惨なことで、今考えると、その苦勞も懐かしいようです。大部分は忘れて一抹の淋しき、虚しさがよみがえります。わが青春はなんだったのか。ただ、二度と戦争はいやだ。

支那大陸縦横数千キロ

愛媛県 三浦 一男

私は昭和十七年一月十八日、広島西練兵場へ集合し、上海の電信第十二連隊第四中隊（無線中隊）に入隊しました。北支、中支、南支と支那大陸を転戦し、武運めでたく昭和二十一年六月、無事復員帰宅しました。

大正十年三月一日生まれの私の経歴は、郷里の高等小学校卒業後、東京の顕微鏡の工場へ就職し、検査の仕事をやりました。当時の東京行きには、西条から四名、隣の中萩町（現在は新居浜市）から六人くらい一緒になって、それぞれの小さな胸に不安と希望を抱いての旅立ちで、初めて親元から離れての人生の第一歩

でした。この会社には四年余り勤めました。徴兵検査は郷里の西条で受け、甲種合格。

次に、入営当時の私の家族の状況は、

祖父 死亡

祖母 健在 農業手伝い

父 健在 農業（水田、畑計八反くらい）

その他住友林業の下請けなど

母 健在 農業手伝い

弟二人 健在 電電公社その他勤務

妹四人 健在 クラレ勤務、家事手伝い、その他

ということでした。私が兵役に服するための家計への支障はなく、後顧の憂いなく家族や郷党に励まされ、勇躍して広島へ向かいました。

この時、西条からは六人、愛媛よりは八〇人くらい広島へ集まったと思います。広島では、金水旅館に宿泊、ここで被服受領、私服は全部脱いで、かわいい初年兵に。御用船に乗り支那、上海へ、やがて上海飯田栈橋へ。陸軍の青葉病院、海軍の飛行場、軍司令部に隣接して電信第十二連隊がありました。呉淞地区だそ